

本の産を天下第一とする事本草にも見えたり、遠めがねは千里鏡なり、人相めがねは天眼鏡なり、數めがねあり、火とり目がねあり、虫めがねは七奇圖説に顯微鏡といへり、されば蜘蛛の足二三歳の小兒の臂ほどに見え、人髮拇指の如き大さに見え、竹の節のごとく細かに節ありて、少年の髪は節遠く、老年の者は節つまれりとぞ、

〔長崎夜話草〕^五長崎土産物

眼鏡細工 鼻目鏡 遠目鏡 虫目鏡 數目鏡 磯目鏡 透間目鏡 近視目鏡 長崎住人濱

田彌兵衛といふもの、壯年の頃蠻國へ渡り、眼鏡造り様を習ひ傳へ來りて、生島藤七といふ者に教へて造らしめたるより、今にその傳なり、

〔橋庵漫筆〕^{二編}「本玉の眼鏡と云ものは、眼の爲によろしといへど、實は甚よろしからずとぞ、今日本にて制せしめがねは眼の爲によろし、夫眼は青き色を藥とし能有として、眼を專はらつかふ者は座右に石菖蒲などの物を置いて眼を育なり、日本製の目鏡は自然に青み有てよろし、本玉の目鏡は白きに過ぎ、其上寒冷の氣勝故、眼を虚寒せしむ、眼に損有て益なし、眼は常に外より温め内より涼からしむるによろし、かならず寒冷の氣勝しむべからず、眼の性を養ふ十訓は、一淫二酒三湯四力五行六音七苦八風九白十細といへり、誠に一身の日月にして明らかならざれば萬事休す、先文と云武と云及四民とも、失明しては身を立る事難し、扱阿蘭陀人のたしなむ眼鏡は、皆青玉なりとかや、本玉益あらば阿蘭陀に用ふべきに、左なきを見れば和産の物然るべし、

〔雅遊漫錄〕^三鑿鑿

提學副使潮陽林公有二物如大錢形質薄而透明如硝子石如瑠璃石如雲母每看文章目力昏倦不辨細書以此掩目精神不散筆畫倍明中用綾絹聯之縛于腦後人皆不識舉以問余余曰此鑿鑿也出于西域滿刺國或聞公得南海賈胡必是無疑矣後見張公方洲雜錄與此正同云見宣廟賜胡宗伯物